

# 風狂

第47号

風狂の会

詩

マグマ	原 詩夏至
六月の授業参観	高 裕香
死灯が見えた	富永 たか子
花はポトリと	出雲 筑三
怒りの自画像	長尾 雅樹
幸福の味を守るもの	高村 昌憲
諺辞典（一）	なべくら ますみ

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（三十一）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

丸山真男追想	神宮 清志
--------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（十三）	高村 昌憲 訳
-----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント

キラウエア火山の  
ゆるゆるしたマグマが  
路駐の車を遂に呑むように  
妻よ  
何物の接近を  
あなたは  
そんなに恐れているのか  
さっきから。

カエルのようなの！  
ガマガエルのようなの！  
ほら見てごらん！  
少しずつ！  
怖いよ！  
二階の居間で  
テレビを見ながら  
なのだろう  
あなたは  
俺を呼ぶ。

何だよ騒々しいなあ！  
俺は ものう 懈く  
下と降りてゆく  
三階から。  
手には  
読みかけの  
妖怪本。  
病気の妻の快癒を願った  
深夜のお百度参りの夫を  
浮気と思った妻が  
じゃ 蛇と化し  
食い殺した話が  
書いてある。

妻よ  
そいつは確かに  
カエルに  
ガマガエルに  
そっくりかも知れないが  
としても  
また反面  
目に映るもの全てがカエルに  
醜いガマガエルに見える  
あなたの目が  
或いは少しずつ  
蛇と化し始めている――

そんな可能性も  
少しは  
ないのかい？

うわーっ、カエルだ！  
遂に来た！  
ガマガエルだ！  
両目を吊り上げ  
あなたは絶叫する  
引き戸を開け  
のそっと居間に来た  
俺を見て。

そうか、カエルか  
ガマガエルか  
なら仕方がない。  
俺は吞まれる  
キラウエア火山の  
ゆるゆるしたマグマに  
目を閉じて。

現代っ子は、まことに不思議である。  
チャイムが鳴ろうと、親がいようと、  
何時ものようにバラバラにやって来る。

委員長が「起立！」と言っても揃わない。  
大きな声で叱っても仕方がない。  
「世の中に役立つ人はあいさつがよくできます。」

今日は、最後までやさしい先生でいたいです。  
説明文の読み取り方の勉強です。  
「世の中に役立つ人は話がよく聞けます。」

さあ、「一段落の読める人。」と言うと  
いっせいに手を挙げるが、漢字が読めない。  
「世の中に役立つ人はよくがんばります。」

「千年の釘にいどむ」という单元  
白鷹さんの鍛冶職人としての生きざま  
薬師寺再現のため千年以上持つ釘を作り続ける。

白鷹さんに負けられない。  
現代っ子にも負けられない。  
私にも教師という「意地」がある。

七〇一号教室は風の中  
病をおして師は  
家族に支えられて教壇へ  
死灯が視野に入って来ましたよ  
幽かな笑みの中での講義だった

春田打つ男の<sup>ひとかた</sup>人形を  
盆にのせた少年が豊作を祈り  
唱え歩く農耕の民の形が  
ハッと横切る教室  
神話が飛び出し  
物語と追憶が招き寄せる  
密かな心の拠り所

女子大での民俗学  
二十数年の時が過ぎた  
過去への遡行は  
未来への秘めごと  
古人の不朽の足跡に出会う嬉しさ  
思わぬ曲者に出会うて  
小躍りしたくなる楽しさ

親しんだ声の向こうに  
西日を浴びた一掴みの生へのことば  
重い一刀のようだ  
続きは次回へ  
と夢を繋ぐ師へ  
気を張るのに骨が折れた

吹きやまない校庭の風の道  
綱渡りの危うさで遠ざかる師の後姿

神隠しに会いそうな日暮れだ

決断の時に目をつぶる癖  
いつも一日伸ばしにし  
そしていつもの後塵を浴びてきた

遅延とは  
決断力のないことの証明  
アリの肢は決意に満ちている

白い椿も紅い椿の花びらも  
丸ごと決断力を持っている  
身投げを愉しむが如く

ひらひらと土に埋まるのは  
優柔不断の極み  
風にゆだねて飛ぼうす泥の請求書

地面につくと音がよく聴こえる  
懐かしき四季とつややかな緑  
まだ何かを待っていたい花卉

日陰の斜面を染める一面の椿  
時には木漏れ日が笑ってくれる  
風がそよぐと紅い絨毯はそよそよと

両手を直角に挙げて  
黒い顔の口は歯を剥いて  
目はらんらんとして睨み据える  
見えない軽侮の視線の向こうを  
閉ざされた人種の罣は精神の枷になり  
鬱積された反抗の意思は  
怒髪天を突く思いの心痛の種となる  
赤い服に黒い糸筋を引いて乱数が描かれ  
両足は暗闇の中で水色に陰っている  
怒るものの対象を弁明の性の無価値に求め  
既成の権威に否定の言葉を投げ捨てて

怒る人の頭上に天使の輪が浮かび  
黒人の救世主たるべき存在を宣誓する  
高揚した精神は宿命の骨格を計算する  
黒い背景に時計は時を刻むことを忘れて  
止まったままで怒りの矢を張りつめている  
白い炎が黄色い炎が巻き上がる

黒人の手は灰かに明るく透かされて  
震える慙愧の指先から虹が掠める  
誰を恨むでもなく  
怒りの言葉は声にも文字にもならなくて  
しきりにギザギザの落書となって宙を飛ぶ  
目の視線  
目の矢印

黒い炎は肉体を焼きつくすだろう  
鬼になった黒人の顔は鋭く怒気を込めて  
残った足の先から注射針を注入する  
蔓草のカテーテルは怒りの根源を突きとめ  
毒草の悪をいつまでも罵り続けるだろう  
文明はいつも公平とは限らないのだから



自らに確信が無い者は疑うこともしない  
愛と信念を持って真面目に疑うことです  
確信が懐疑を生めば自由意志を逃さない  
意志を失った奴隷に無いものは幸福です

神学が全てを台無しにしたと賢者は言う  
見下して疑っても不安しかないからです  
パンを得る様にして天に祈るのでしょうか  
歌いながら作るパンなら未だ救われます

悲しむことは難しいことではありません  
気分に従って生きる性癖が悲しいのです  
しかし人間は悲しい動物ではありません  
意志を持てば行為から喜びも生まれます

喜びは難しくない行為から生まれません  
幸福を守るのは難しく美しくもあります  
力量を証明する人であってはなりません  
競争を齎す思想に正しさは無いからです

幸福も競争の行為の中からは生まれません  
苺には苺の味がある様に人生にあるのは  
幸福の味であると言って賢者は憚らない  
青春の意志に違いないこの味を守るのは

夜爪を切ると親の死に目に会えない と  
誰からともなく刷り込まれていた

それを気にしていたわけでもなかろうに  
夜になって爪を切ることはなかった  
それなのに  
父の時も  
母の時も  
会えなかった

黒塗りの物々しい車が通ると  
両手の親指を掌に畳み込み  
さらに後手に隠して見送った

風呂上がりの爪を切る  
一日が終った  
夜の時間に

厚みを増し  
堅さを増し  
ひたすら指先を護ろうとしていた  
爪  
風呂上がりの緩みに  
すっかり柔らかくなっている

夜爪は  
世を詰めるに繋がるとか  
切り落とした爪を  
紙に包んで捨てる



三浦 逸雄 「白鳥が来る地」 油 彩（麻布15号）2018

丸山真男が世を去ったのは一九九六年八月だった。丸山真男は東大法学部に籍を置いた政治学者で、東洋政治思想を専門とした。丸山真男は「丸山政治学」と呼ばれる政治学の一つの体系を作り上げ、その主要論文は英語・ドイツ語に訳されている。丸山真男は長大な論文を書くよりエッセーを多くものし、座談を得意とし、多方面に影響を与えた。

同年八月一九日付けの「東京新聞」に佐々木毅氏は次のように書いている。

「ある時、誰かが先生に、日本人の類型として世界に通用するものは何かといったような質問をしたことがあったが、先生は言下に『それはサムライだ』と応答された。先生がお亡くなりになったことを耳にして、私の脳裏に浮かんだのは先生のこの一語であった。つまり、われわれは今世紀最大の『サムライ』の一人を失ったということではなかろうかと」

晩年の丸山真男語録に次のようなものがある。

「ソ連邦がこんなに早く崩壊するとは思わなかった。見誤っていた」

「日本に五〇年の戦後があり、ここにこれほど民主主義が根付かないとは思わなかった」

これは二つながら丸山真男の嘆息ともとれる率直な感想であり、多くの感慨とともに共感出来るものがある。

丸山真男の思想の出発点には、戦争体験がある。二回応召し、広島の子供で原爆に遭ってもある。軍隊の非人間的な構造は日本社会の縮図だと丸山真男は言う。前近代的で封建的な体質、この問題を深く考察してゆくなかで、次のような発見をする。

日本人の体質の中に大きな二つの特徴がある。

その第一は「成り行き任せの体質」である。既成事実の積み重ねによって、歴史が自然に出来てゆく。あたかも自然現象のように諸々の現象が起こり、それが既成事実として積み上げられ、これを批判することなく人々は受け入れてしまう。“やってしまったから仕様がなし”とあっさり既成事実を追従してしまう。

その第二は「無責任の構造」である。マイナスの出来事に対して責任を追求しない。部下は上役を責めない、上役はその上役を責めない。今次の大戦の責任でも、最高責任は天皇にあることは間違いない。天皇の側近中の側近であった木戸幸一は「（この戦争の）責任は天皇にある。よって退任すべきである」と言っている。しかし天皇は責任をとらなかった。これが日本社会の構造を象徴している。

ところがそれ故に、他のアジア諸国に先んじて経済的に大発展してしまう。明治の近代化、戦後の復興、これが無責任・成り行き任せ体質にその一因があり、経済発展の秘密にもなっている。

大正から昭和にかけて、マルクス思想がどっと入ってきた。このことのプラス面の一つとして、思想的座標軸がないところへ、一つの座標を与えた点が指摘できる。それ以後の思想家のほとんどが、その洗礼を受けた。とくに戦後多数登場した「進歩的知識人」たちはこぞってソ連寄りの立場をとったのに対し、丸山真男はこれを批判し続けた。「マルクスの描いた社会主義と、ソ連のそれは水と油である」と。

さらにまた「民主主義は自由主義をベースにして成り立つ」と主張した。これは丸山思想の根

幹の一つでもある。民主主義があつて自由主義があるのではない、自由主義が先に来なくてはならない。民主主義は衆愚主義になりやすい。そうならないためには、個人個人の精神の強さが要求される。少数意見を説き続ける強さ、これを「精神的貴族主義」という言葉で示した。民主政治における精神的貴族主義の必要性を好んで口にされたという。多数に従うのが民主主義ではない、互いの違いを認めあい尊重するのが民主主義である。

「日本帝国の实在より戦後民主主義の虚妄にかける」と語ったのは昭和二〇年代の頃であった。丸山真男はいま何を語るのであろうか、ソ連邦が崩壊して以後社会主義国家に次々と異変が起こったけれど。丸山真男は巨大な理論に常に懐疑的であった。そして「幸福な懐疑主義者」ということを言った。この言葉の対比として「不幸な独断論者」がある。丸山真男が否定したのはまさにこれだった。

こうした丸山真男の思想は、今日なお大きな恵みをわれわれにもたらしてくれる。ここでわたしは二つのことを考えた。その一つは敗戦の時に遡り、大きな驚きがあったことだ。当時小学生だったわたしは「戦争は絶対勝つ」と言っていた大人たちの言葉を信じ切っていた。「神風が吹く」「鬼畜米英はこの手でやっつける」いま考えると滑稽そのものに違いないが、「ボクラ少国民」は本気で信じていた。ところが戦争が終わって一カ月もしないうちに、大人たちが一斉に「こんな戦争に勝つわけない、初めからそう思っていたよ」と言い始めたのである。このときの驚きは今でも忘れない。日本人のこうした豹変ぶりは、その後も幾度か出会うことになるが、その都度日本人というのは変節人間なんだと思い、深い憤りと絶望とを感じてきた。

このことを「既成事実を自然現象のように受け入れてしまう」という表現で分析されると、何か別の見方を教えてもらったように思えてくるのである。それが経済の高度成長の秘密になっているとは思ひも寄らぬ見方であり、わたしは大いに啓発された思いで、ある種の救いに似たものを感じた。

ソ連が崩壊したとき、初めからあのようなになると思っていた、といったふうなことを言う者が多いなかで「ソ連がこんなに早く崩壊するとは思わなかった。見誤っていた」と言える人が居たということに、敬意を抱かずにはいられない。やはりこのひとはサムライだったのだと思う。このように己の過ちを素直に認めることが出来るひとが珍しいということは、そうしたひとが滅多に見当たらないということなのだ。日本人全体が相も変わらず変節人間であり、その体質の弱さに気付かされる。自分自身を把握出来るひと、自分の発言に責任をもてるひとが育たないかぎり、民主主義は根付かないに違いない。

日本人の多くが丸山真男的姿勢を身につけるようにならないと、ほんとうのデモクラシーは実現しないのではないか。われわれは「精神的貴族」たらんために、己を作りなおす努力をしてゆくことこそ、丸山真男の思想を引き継ぐことにつながり、それがわれわれに課せられたテーマの一つと言えるのかもしれない。それにしても「精神的貴族主義」とはいい言葉を残してくれたもので、楽しい気分では日本の未来を考えることが出来るような気がする。

もう一つ考えたこと、それは六〇年安保闘争とその後の状況のことである。丸山真男といえば六〇年安保闘争とどうしても結びついてしまうのである。丸山真男は六〇年安保闘争の精神的支柱といわれ、わたしたちはたとえその思想を理解していなくとも、文句なしに信頼しきっていた思想家の一人だったことは間違いないからだ。わたし自身丸山真男の著作はまったく読んでい

なかったし、直接話を聞く機会もなかった。わたしが接しえたのは、岡本太郎・花田清輝・佐々木基一・中島健蔵・谷川徹三・乾孝・中野重治といった面々であった。

このひとたちの名前をこうして列記しているだけで、もう一度青春を生きているような感情がよみがえってくる。あの闘争はいったい何だったのだろう、多くの者が傷つき人生を狂わせて、通りすぎていったあの行動そのものは、わたしたちに何を残したのだろうかとずっと問い続けてきた。

そんななかで、一九八六年七月八日に偶然佐々木基一の講演を聴く機会を得た。演壇に立つ佐々木の姿を見て我が目を疑った。岡本太郎・花田清輝らとともにアヴァンギャルドの旗手といわれ、大学の大教室で熱弁をふるい、学生たちの熱烈な拍手につつまれた頃の面影とはまったくの別人がそこに立っていたのである。舞台は同じ大学の大教室ながら、聴衆はまばらで寂寥感さえたよう空間に、沈んだような佐々木の声のみ流れる。その言葉の一つひとつは胸にしみてくるものがあった。

「『諸々のしあわせの時代は歴史のなかの白紙である』これはヘーゲルの言葉である。世界史のなかに満足はあるが、それは幸福ではない」

「戦後文学は幻影であった。その幻影のなかに一つの新しい言葉があったことは事実である」

「挫折の体験から学ぶもの、これが未来をつくる」

これらの言葉に、わたしは自身の心の奥にあったものの核心をズバリ言い当てられたような気がした。

「民衆運動が挫折し、敗北して、その中から学んだもの、それが大切なのだ。そして挫折を知らない若いひとたちと交流することが必要なのではないか」

これがこの講演の結びの文句だった。この言葉を聴いて、あの闘争は敗北だったのだという認識を鮮明に定着させることが出来た。

その後一九九三年の雑誌『海燕』誌上で「ロシアについて」という題で、安岡章太郎と佐々木基一が対談した。ソ連崩壊について語り合い、なかなか読み応えのあるものだった。そのなかで、民衆の底力を認め、その耐える能力のすごさに感嘆するところがあった。圧政に屈してしまい、ときに密告するのも民衆なら、圧政に耐えて生き抜くのも民衆である。そして経済の発展に尽くすのも民衆である。「人間こそ資源だ」という言葉が出てきて、それはそれで納得できた。

その後以上の内容について検討しているうちに、次のようなことを考えた。六〇年安保闘争に敗北し、挫折したことは何を残したか。これは次のように考えることが出来るのではないか。敗北し、挫折したという経験をもちえたことそのことに意味がある。さらにそのことを考え続けたこと、それが今日の自分を形成するうえで、大きな役割を果たしてきたことの意味は大きいと評価してもよいのではないか。それがこうした丸山思想を受けとめる力となっており、認識出来るということにつながっていると見るならば、大きな果実を残したと言えるのではないだろうか。

年月が経つということは、また新たなエネルギーと可能性を創り出すことになる、そう考えてみるとやはりわれわれは生き抜かなければならない。そして考え続けなければならない。（了）

## 第十一章 (その1)

一九一六年一月に、我が軍はボーモンから近い場所を取戻しましたが、一方には我々の砲兵中隊がおり、もう一方の相手はフリレイにおりました。そして起伏の多い土地は静かでした。しかし、司令官は砲撃が届かない大変に大きな村のミノルヴィルに残っていました。雌牛とミルクと実際の馬小屋もあり、殆どにベッドもあります。電話線に沿って行く競争も幾らかありました。私にも一部屋あり、ベッドのスプリング台上にはマットレスが二つありました。つまり私には素晴らしい驚嘆の時間でした。私と良く知り合いになった中尉は、それ以上恐ろしくなくなりましたし、彼はマットレスに引き付けられていました。彼は私に言いました、「私はマットレスを一つあなたに与えますが、一番良いものを取って良いのですよ」。そして選ぶことになります。しかし私は彼に言いました、「それでは二つとも運んで下さい。スプリング台はまずまず上等です。私はマットレス一つでは最早眠れませんから」。実際に彼はマットレスを二つ持って行かせました。私はマットレスを意に介しませんでしたが、それでも私は彼に少し気詰まりを感じました。彼は私よりも十五歳以上若かったのです。私が死者にうんざりした日があったり、あるいは良く言われる様に私が眠っていた干し草のベッドで、身動き出来ないまでに丸太棒の様に固くなって眠った日があったのもこの村です。これは一連の特別な訓練でした。私は飛行士の長靴に驚きました。そして私は思い切って腿まで泥の中に這入ってみました。足を引き抜く努力を一日中行った時がありましたので、筋肉をそれ程鍛えて置くこともなかったのです。その点については、偶然に私は十キロメートル程進まなければならない時もありました。しかしそれは、私のことは何も気にせずテーブルの傍に私を三時間も立たせて置いて、自分は座っていた植民地軍の将校の処へ行くためでした。その代わりに、その後で私は植民地軍の台所で美味しい夕食を味わいましたが、更に私が教えたことで手に入れたチーズと極上のブランデーもありました。それらはコックたちを感激させました。彼らのうちの一人が「これからもそれらは手に入るだろうね」と言ったので、私は「それではそれらが手に入った時には何を作ってくれるのかね」と尋ねました。一九三一年八月の今日にそれらの日誌を読んだ後でも、私はこの質問をした時の感覚を忘れないでいます。物質に対して精神が勝利した後に、私は干し草の上へ行きました。それから大きな疲労を感じました。翌日の夜、私は足を引き摺りながらやっとの思いで前進しましたので、到着したばかりのJ中尉はもう私に目を付けていました。私は彼を憎み、宿営地を憎みました。そしてそのことは当然のこととして、より一層戦争の近くに私を送り込みました。数日後に、私は師団へ電話機を取りに行かなければなりませんでした。もう一人の中尉は連隊長を補佐していて大変に親切で、私が満足しているかどうか知りたがっていました。私は宿営地での生活に関して少し話をした後で言いました、「それを見るために戦場へ来たものではありません」。彼は単に言いました、「他のことも見る事が出来ますよ」。その日に例の司令官は、大きな力を持って沢山の仕事を持つフリレイの部署へ私が行くのが好きかどうか尋ねました。彼はお世辞も幾らかつけ加えて言ったのです。私は好きなものは何も無いし、何も選択しないことに決めていて、命令を実行するだけであると答えました。数日前に彼は、下士官の階級と、軍隊の中樞であるタルジュ連隊長側近の秘書の地位と、どちらか一方を私に提案していました。私はそこで

っぱりと断りました。事務局へ行って私は何をするのでしょうか。私はそこでは何の役にも立ちません。でも、今度は拒みませんでした。彼は私を任命しました。かくして運命は、手を伸ばしてから引っ込みます。如何に選択したくなくても、何時かは選択しなければならないのです。

一種の小麦用の袋であった私の砲兵の袋を新しい部署へ移動する前に、私は命令が示している二つの話をその儘に語りたと思います。必要性と緊急性がより一層良く感じる様に、殆どが兵舎の生活である宿営地の生活はそこでも大変良く理解されました。当時は我々の短筒の小銃が取り替えられました。機関銃手たちには最も良く使用されていた同じ口径の武器でした。アメリカのものと言われていて、銃尾は全く異なっていました。分解して、きれいにして、再び組み立てなければなりません。そして最初は、見様見真似でその順番を見付けなければなりません。問題は機械全体に戻ります。急いでやらなければなりません。というのも私たちは翌日に、色々な武器の点検が告げられていたからです。私はこの種の仕事が気に入っています。私の仲間たちも、それには巧みでした。要するに私たちは屋根裏部屋で、きれいなハンケチの上にグリースの跡も無く輝いている部品を順番に広げて良いのです。何故なら、その様なことをするには決まりがあるからです。ところが屋根裏部屋の埃の中で、その決まりを適用するのが困難であることは分かりません。再役軍人と同じ位に自信があった私は、恐ろしい将校が来るのを待ちました。しかし、見終わってあちこちでがみがみ言っていた将校が、私たちを梯子から見て、つまり高い処から見ていて、微笑して去って行きました。権力の規則の一つはその点では甚だしい自惚れに似ていて、期待される様なことを決して行うものではないことを私は見抜いた様に思いました。私はもう一つの状況においてもその証拠を手にしましたが、それは酷く恐れられていたG大尉が、大変良く整えられていた馬具の装着を点検しに立ち寄った時に、締め金や留め針の処に革の小さな傷を見付けては楽しんでいたのです。そして、三回までも全てやり直しさせたのです。それは涙が出る程でした。しかし部下たちは勇気と手腕を集中して、四回目には全てが新品の様になりました。自尊心と希望は一種の愛と無縁ではありません。しかしその大尉からはやって来ませんが、それが善であったと言わせているのでした。彼には他にやるべきことが何も無かったのです。私たちはそのことを知りました。貶<sup>けな</sup>された完璧な作品を部下たちが馬小屋で再び装着している間、彼は何もしないで居残っていたのです。勿論、スタンダードが言っている様に、彼は支配していたのです。

フリレイという地点は棘でしたし燃えていました。ヴェルダンへの攻撃の気晴らしを求めているこの時期は、なお一層そうになりました。しかし私が軍人精神を持たない兵士でありたいと願うことが出来たのも、全てそこで見出したのです。連隊長を補佐する中尉がわざわざやって来て言った様に、私は自分の家具の中で迅速に落ち着いて如何なる人々にも何も言わずに、仕事を観察するための数日を自分に与えました。私は、傾いた岩で非常に上手く守られていた、タールを塗った厚紙で出来た事務室にいました。そこには三十二本の電話線が付いた電話装置があり、師団の砲兵隊と当戦区の歩兵隊との中間にありました。各砲兵隊には電話線があり、歩兵隊にもあり、師団にもありました。二人の話者は仕事に正確なものを全て提供しました。ベルの音が鳴る度に降りる小さなシャッターは、電話がかかっていることを示していました。差し込みが、多様なあらゆる結合を可能にしていました。それは私にとっては新鮮なことでした。しかし、少なくとも私は一人前の耳を持っていて、もしも言って良いなら、電話から戦争の現状や見通しを知りました。見抜くこととは、その時は半分が聞くことです。一週間後に、私は通常の時間に立派

に電話交換の役割を果たすことが出来ました。そして二週間後には、最も敏捷な者にも匹敵しました。しかしながら一週間後の時は、余りに気難しい性格の或る化学者が重要な時でも庇の無い帽子を司教の縁無し帽子の様に裏返しに被っていたのですが、私はその時彼を超えることが出来ませんでした。動揺の最初の兆しが直ぐに来るその仕事は、同時に鳴った呼び出し音でも五回か六回で応答することになり、階級や緊急性に従って上訴人たちを両方とも電話につなげることにあり、彼らの話が終わるや否や差し込みを入れ直すことにあり、黙って忍耐していた相手につなげることにあり、そして同様に電話中であつた連隊長に迷惑を掛けること無く全ての人に可能な限り応答することにあります。しかし、踵に砲弾のどんな衝撃があつても迂回した小さな道を通つて私たちは素早く避難所に到着しました。ここには速さの外には他に困難はありませんでした。そして実際にその仕事には、どんな躊躇した動作も無駄な言葉も排除されていました。例えば歩兵隊が障害物を尋ねた時、それは屢々演習の様に行われましたが、時々は危機の時もありました。私は呼び出し音と、私たちの頭上で唸りを上げていた砲弾の通過までの間を、三十秒以上の時間を置かない様にしていました。これは素晴らしい仕事であつたと私は言えます。しかし私には先ず混乱した数々のことがあつたのです。幾つもの班が順番に様々な砲兵中隊からやって来ました。将校補佐は屢々変わりました。そして連隊長は役に立ちませんでした。連隊長は一瞥して私を良き召使いの人間と認めましたが、彼は間違つていませんでした。そして直ぐに彼は、私が彼だけにしか従属しないやり方で沢山の権限を私に与えました。「班の構成、任務、休息に対してあなたはやりたい様にやってくれ。そして私を問題で困らせないでくれ」。その様に実際に行われました。私は電話交換手を選択しました。嫌がついていたりぐずぐずしていた者はどんな者でも除いて電線の修理兵たちを選びました。私の小隊は手腕があつて良い雰囲気です。夜でも昼でも事態が悪化した時、そして唯一の技手が三人の人手と二人の頭脳を欲しがり始めると、どんな活動にも乱れることはありませんでした。巡回の中に入っていた一番元気そうな者が、二段ベッドから出て来るのが見られました。決して命令が与えられたものではありません。私は掲示用の板とか、記憶の手助けになる略図を置くことに専念しましたが、それは彼らに意見を求めることであり、まさに自惚れさせてはならないためでもありました。その様な障害に対しての砲兵隊の変化は準備すべきことでした。その様に正確な時刻に他の者と交替させたのは掲示用の板でした。しかし更に十分前には、新しい砲兵中隊においても全員が生き生きしていたことが確信されていなければなりません。そして時々何も理解していなかつた新しい電話交換手が激しく非難されました。そこから将校へ電話が行きました。そこで私は何時も、些細なことには全て完全に無関心であることを美德としていた連隊長の名において、話をしながら頓着せずにその場を収めました。本当に彼はまさにそれらのことを知りたくなかつたのです。そして、私たちの見事な演技は演技でなくなりました。戦線が熱を帯びて来たのです。急襲と夜間砲撃と突然の弾幕が何時も不意にあり、我々は全員待機しなければなりません。私は或る日、地面の震動によって腰掛から立ち上がったことを思い出します。十五発の地雷が破裂したことを私は次々に理解しました。一番急いでやることは、全ての砲兵中隊へ警報することでした。一分後には弾幕がひゅるひゅると通り過ぎました。その効果は完璧でした。敵は一メートルも前進しませんでした。でも丁度その時は、私は何も知りませんでした。歩兵隊の連隊長が走りながら到着しました、「全ての弾幕を攻撃させなければならぬだろう」。私は彼に大空を示しました、「弾幕は通過しています」。これらのやり方は半分程しか喜びはありませんでしたが、私

にとっての連隊長は私を城壁として役立たせたのです。

彼は何時も来ませんでしたし、直ぐに司令官たちが取り替えられました。司令官たちが止まっていたのは六日間でした。その様にして私は、前の司令官とその補佐役のJ中尉に再会しました。慣れる癖がつけられていました。私は慣れて強気になりました。連隊長という名だけが彼らを敗走させました。そして全てのことが大変上手く行きました。しかしながら私はそれらのあり方を忘れてはならなかったのですが、時々忘れました。或る日、見知らぬ中尉が弾幕の遅れについて私に質問がありましたが、それは時計に誤りがあったためと言われていた遅れでした。後になって分かったので、私は自分自身で不満な様子を話すつもりで言いました、「私はびっくりした」。この言葉は私の地位を超えていました。彼は威厳を持って毅然と私に言いました、「びっくりしたのは私だ」。私はルイ十四世のことを理解しました。しかし、サン＝シモン(1)が語る青い服の下僕に似て、これらのあり方を守る状況にあった私は、やりたい様にやりました。しかしながら或る日、連隊長自身が国主の視線を私に注ぎました。ノンザールへの七五ミリ砲の一斉砲撃が要求されました。ノンザールは射程範囲外であることを私は知っていました。僅かな言葉で答えてから私は、先ずこの要求のことを連隊長へ報告に行きました。彼は物差しを持って地図を調べていました。彼には知識が無いのです。その後で、彼は私に答える様に言いました。何でも答える様に言いました。私が言うのは間違っていました。「それは本当です」。私たちの協定は誤りであったと私は理解しました。しかし当時の彼の避難所は少し打ち壊されていて、運転手も負傷していました。彼は最早戻って来ませんでした。司令官たちは複雑な仕事に足場を置きませんでした。彼らには六日間に仕事を学ぶための時間はありませんでした。騒音の中での睡眠にはすっかり消耗しました。私たちのベッドが夜中揺れていたのは本当です。しかし私たちは眠ることを学びましたし、それは私が消耗しなかった一つの技術でもあります。(つづく)

(1) サン＝シモン(一六七五～一七五五)は、作家・政治家でルイ十四世下の宮廷生活を回想録に描いた。

## 執筆者のプロフィール（五十音順）

---

### 出雲 筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

### 高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPST A指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

### 神宮 清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

### 高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（パブー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

### 富永 たか子（とみながたかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回游」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』（第二四回横浜詩人会賞受賞）

② 『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾 雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

アラン『大戦の思い出』（十二）： 第十章 貴重な戦争体験の中で、楽しむ方法を見つけたこと、不幸を生まない為に方法を練ったこと、暖かな奥深い避難所での良き思い出があったことなど、この程度の戦争なら耐えられるとありました。ほっとしました。日本兵にもあったのでしょうか？

忍び寄る死の影： いろいろ教えていただきました。「きょうの日だけが人生だ」とうたった詩人がいましたが、私はまだ何の支度もしないで、ぼーっと過ごしています。お兄さまは、お偉いですね。自殺はもったいないと思うのですが、安楽死を望まれる方の心情を伺えば分かります。若い人に迷惑をかけたくないと思うのですが、こればかりはどうにも分かりませんので・・・

三浦逸雄の世界（三十）「ポートレート」： 誠実な人の苦悩を感じました。具象も抽象もなく、苦悩は観る者の心に伝わって来ますから、大切なのは苦悩を表す画家の生命のように思いました。

石垣： 今は、石垣ばかりの大手門を入城して、新緑に雪が降った後の、美しい光景が目には浮かびます。幾星霜を経て、石垣は何をかたっているのでしょうか。

五月の風： 五月のさわやかな風にさそわれて、山や海に出かけたくなりました。あなたと愛のうたを歌うなんて素敵ですね。

懐疑の箱庭： いつからでしょうか？ この場合、疑うことは狂人ではなく正しいことと共感しました。どうしてでしょうか？ 支持者の数が多いの？ 私達の責任だと思うのですが・・・

グリコ男： 道頓堀のグリコ男の映像が流れると、何も考えずに、ただ、シンボルのように懐かしく見ていました。娘が大阪に住んでいるので。このように人生に思いをはせると、面白く拝読しました。

パパはお仕事： お仕事に出かけるパパを、改札口で見送るおさなごとママの様子が、ほほえましく、心情がよく沁みてきました。

ダリの記憶： ダリの絵画でしょうか？ 不思議な絵が見えるようです。

旅： 敗戦の日本で叫んだ言葉、ジーザス・クライスト！（言葉を知りませんでした）スペイン・イタリアでの大戦での、エズラ・バウンドのことも知りませんでした。何のつもりだったのでしょうか、店のお内儀の顔は？ 世間が狭くて、知らないことばかりでした。（以上）

同人誌 風狂(ふうきょう)第47号

2018年6月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/122259>

編集：風狂の会（担当：高村 昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122259>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト